

近代中国における蔡元培教育思想の役割とその周辺

Cai Yuanpei's Thought of Education: Its Role and Influence in Modern China

蔡 建国*

要 旨

「西洋の衝撃」をめぐる中国思想文化発展の歴史構造及びその変動を再考察する時、文化思想と密接に結びついている近代教育、特に大学教育のあり様をぬきにして論じることはいかならない。

本論は、従来の研究を踏まえ、近代中国社会の変容の中で、とくに教育領域において現れている諸問題の中に貫通している「伝統」と「近代化」の関係とその矛盾を究明しようとするものである。こうした問題を検討するための着眼点として、近代中国知識人を代表する者の一人であり、また、大陸と台湾の双方から評価されている蔡元培の教育思想を究明することによって、近代中国において教育近代化の過程と様態を明らかにすることができ、また、変動期における中国の知識人の役割も明確にすることができると筆者は考える。しかし、日本における従来の蔡元培研究にあつては、この問題についての研究はなお不十分である。さらに、「西洋の衝撃」を受けて中国の近代化を目指し、国民国家建設を一側面で担う知識階級の価値はまだ十分に研究されてない。しかしながら、近代化を実現するための教育の役割を深く研究することによって近代中国の構造変動の特質を再認識することができると思われる。

また、本文では現在進行している政治・経済改革路線の中でも、物質文明と精神文明の関係、国民素質の向上などの諸矛盾の解決するための教育作用を再確認する必要があることも言及した。

従つて、本論は蔡元培の近代中国教育改革理論を再議論することによって、教育と思想・文化の関係及び教育と社会の変容などを分析し、さらにはそれらが、蔡元培の教育思想が中国教育近代化と近代中国社会に対する影響及び役割を明らかにしたものである。

*CAI, Jianguo [情報文化学科]

序言

「西洋の衝撃」をめぐる中国思想文化発展の歴史構造及びその変動を再考察する時、文化思想と密接に結びついている近代教育、特に大学教育のあり様をぬきにして論じることはできない。

拙文は、従来の研究を踏まえ、近代中国社会の変容の中で、とくに教育領域において現れている諸問題の中に貫通している「伝統」と「近代化」の関係とその矛盾を究明しようとするものである。こうした問題を検討するための着眼点として、近代中国知識人を代表する者の一人であり、また、大陸と台湾の双方から評価されている蔡元培の教育思想を究明することによって、近代中国において教育近代化の過程と様態を明らかにすることができ、また、変動期における中国の知識人の役割も明確にすることができると筆者は考える。しかし、日本における従来の蔡元培研究にあっては、この問題についての研究はなお不十分である。さらに、「西洋の衝撃」を受けて中国近代化を目指した国民国家建設を一側面で担う知識階級の価値はまだ十分に研究されてない。しかしながら、近代化を実現するための教育の役割を深く研究することによって近代中国の構造変動の特質を再認識することができると思われる。

また、現在進行している政治・経済改革路線の中でも、物質文明と精神文明の関係、国民素質の向上などの諸矛盾の解決するための教育作用を再確認する必要がある。

従って、本論では蔡元培の近代中国教育改革理論を再議論することによって、教育と思想・文化の関係及び教育と社会の変容などを分析し、さらにはそれらが、蔡元培がめざした中国教育近代化に対してどのような影響を与えたのかを示したい。さらには、蔡元培の教育思想は近代中国社会に対してどのような影響を与えたのかも示したい。

第一章 蔡元培の近代化思想形成と発展の要因とその時代背景

近代中国において、西洋列強の軍事侵略は、西洋文化の強制的侵入をも伴った。「中国は数千年来未有の強敵」(1)に直面し、政治、外交、軍事、経済の危機に瀕すると同時に、半植民地・半封建の民族的危機に遭遇した。この「強敵」の侵攻によって、従来の伝統文明も衝撃を蒙ることを余儀無くされた。数千年に亘って維持された中華文化及び中華思想は大きな衝撃を受け、文化面においても「亡国」寸前の局面に陥った。盲目的な「自我観賞」の立場から、自らを世界の中で孤立させていた清末中国は、外部世界の実態を全く知らなかった。

当時の中国は、陳独秀が1916年に指摘したように、「アジアの東部に置かれ、世界古国の一つであり、開化すること久しく我が境を注視しているものは皆小蛮夷であった、閉戸自大の局面に成り、一切の學術及び政教に対し、自分しか知らなかった」のであった(2)。ところが先駆的知識人はいち早く伝統中国的な「華夷観念」を克服し、「救亡」を目的として、長い艱難の歳月を経て西洋文化の中に「救亡図存」の方法を摸索した。ここに洋務論、変法論及び革命論が提起されたのである。この「数千年来未有の変局」(3)の成果は、伝統文化を全面的に保持する「盲目排外」の国粹論ではなく、また伝統文化を全面否定する「崇洋媚外」の欧化論でもなかった。それは伝統の精髓を維持しつつ、「西洋に学ぶ」という認識から産まれた。「閉関自守」状態に過ごし、「天朝上国」の自大感と固有の伝統的儒教及び文化価値観を持っていた清朝の保守的中国人の中において林則徐、魏源らを代表とする一部の開明紳士が西洋の技術と文明の衝撃に対して、「師夷之長技以制夷」することを目指し、「西洋に学ぶ」ことを主張した。これが、中国近代思想史上最初の対西欧文明認識であったことは周知の通りである。しかし、彼らはこうした「器物の覚悟」として導入する「近代化」を主張するばかりで、中国社会の改造を達成することは出来なかった。

アヘン戦争から洋務運動までの数十年間において「器物の覚悟」によって「西洋に学ぶ」ことは、成功を期し得ない論理的矛盾を含んでいたことが予測されるであろう。「中学為体、西学為用」論を主張した洋務派が成功しなかった原因として、近代中国における「伝統」と「近代化」の関係の曲折性が見える一方で、半植民地・半封建に直面していた清末中国では社会改革が困難であったことがまず第一に掲げられる。

しかし、日清戦争の惨敗を契機として、変法論者の康有為は「上清帝第六書」において、「中国はすでに名存実亡であり、直ちに変法してこそ、救亡立国できる」と主張した、また、「万国の勢を觀るに、変ずれば全く、不変なければ亡となり、全変は強となり、小変は亡となる」と認識し、日本は明治維新による近代化を実現して「我が大国に勝った」(4)とみなした。康有為はまた、『日本変政考』の序文に、「もし中国が、〈日本の経験〉に学んで変法するならば、効果をもたらすことができる」(5)と記している。また、康有為と共に維新運動に指導的立場を占めた梁啓超が『戊戌政変記』のなかで、「我が四千年の大夢を喚起したのは、実に甲午戦役からである」(6)と言っているように、変法論の視角から「制度の覚悟」という意識を抱いたのである。これが、明治維新から三十年後、日清戦争後三年を過ぎた1898年に行われた君主立憲政体を樹立することを要求し、封建政治制度を打破して、ブルジョアの

政治制度に変革しようとした戊戌変法である。

ここに指摘すべき点は、従来の「器物の覚悟」に止まらず、政治制度の変革に重きをおいて、「西洋の衝撃」への対応を図るといった総合的な認識に到達していたことであろう。

このようなブルジョア政治制度改革の意識は、清朝中国に対する斬新な思想として認めることができる。アヘン戦争から戊戌変法までの半世紀余りの知識人思想家が清朝中国の「救亡図存」のため、新しき道を探求した結晶であることは否定できない事実である。

後世に「学界泰斗、人世楷模」と呼ばれている蔡元培はこのような激動の時代、1868年に浙江省紹興府山陰県（現在紹興市）で生まれ、26歳まで故郷で暮らしていた。浙江の古城紹興は、歴史上において文化人を多く輩出してきた。伝統文化及び學術の雰囲気溢れる環境の中で幼年から青年に至るまで中国伝統教育を受け、「潜移默化」な影響と薫陶を受けた蔡元培が、後日深い伝統文化を身に付けるようになったのは当然とも言える。

蔡元培は、17歳時秀才に合格し、23歳時挙人と成り、二年後進士に合格した。その後、翰林院庶吉士を授与され、28歳の時翰林院編修の職を授けた。青年蔡元培は「当代には高名であり、朝野は争い結納を望んだ」(7) という名士になったのであった。

1895年の日清戦争における中国の敗北は、この僅か28歳の青年翰林に衝撃を与えた。士大夫の路を順調に歩いていた蔡元培は、伝統文化の束縛から脱却することを余儀なくされ、西洋文化への関心を持ち始めた。このことは、当時中国の「西洋に学ぶ」べきであるという時代の潮流に従った蔡元培の思想の先進性を示している。彼は、日本の戦勝の原因を分析して、その主な原因は、政治制度、文明思想、経済政策等に至るまで中国が日本に及ばなかったからであると認識した。また、清の敗北の結果、アヘン戦争以来厳しくなっていた民族危機はますます深刻の度を深めていた。この様な中で勢い盛んとなっていた社会革新思潮は蔡元培にとって巨大な衝撃であった。

1898年戊戌変法失敗を契機として、彼は中国民衆教育文化のレベルの低さを痛感し、教育の普及及び人材の育成は目下の最大の急務であるということを感じるようになった。彼は、士大夫達が求めてやまない科挙合格者としての頂点位の「高官厚祿」を捨て、北京を去り、故郷紹興に戻った。彼は、翰林の地位を捨て、当時高揚していた革命風潮に身を投じ、新しい人材の養成と新思想の宣伝を教育方針とする紹興「中西学堂」で教育に従事し、人材の養成という教育生涯をここで始めたのである。戊戌政変をきっかけとして反清革命に身を投じた蔡元培は、百日維新が失敗した理由を、革新的勢力を排斥しようとしたため、と理解して

いた。また蔡元培は、みずからの観察と体験から、中国の大きさと積弊の深さを感じとっており、変法のように根本的に人材の養成に着手することなく、単なるいくつかの詔書によって改革を行おうとしても、全く腐敗した状況を転換させることは不可能であると考えた。その上で、明治維新以降、教育を重視し、人材の養成を重視した日本の経験から深い啓示を得た。これが、彼が、「救亡図存」の目的のために、清朝の高官を辞任し、教育に献身して生涯人材を育成するという新しい道を選んだ理由である。上層部から中国を変革することを企てた戊戌変法は不幸な結果に終わった。それにかわって知識人の中の革命派が抬頭することになる。彼らは更に新しい政治行動を採択し、フランス大革命の目標である平等、自由、博愛を標榜した。彼らは、欧米のような暴力革命こそが清末中国を救亡する唯一の方途であると考えた。彼らのこの様な「革命論」が世紀交替の時代に登場した。

革命派の代表者である孫文が主唱した革命論とは「西洋の衝撃」に対応する論理指標及び理論を構築・展開することにほかならない。

孫文の革命論の主旨は、日清戦争が発生した同年の1894年11月24日にホノルル（檀香山）で結成された、近代中国最初のブルジョア的な革命組織といわれる興中会の章程に見える。すなわち、孫文にあっては、「剪藩」と「圧境」を招来して大清帝国を統治する能力を喪失した「韃虜」を「駆除」し、「恢復中華」を図ることが革命の完整指標とされていた。つまり対内的には満清政府を打倒した上で、対外的には列強による「圧境」を修復し「中華」を「恢復」、「合衆政府」を「創立」することを目指していたのである。孫文の革命構想の目的としての「合衆政府」の「創立」は、勿論、ブルジョアの共和政体を指す。これは、中国に数千年間続いた、腐朽した封建政治制度を完全に消滅させ、先進的な民主政治を作ることを意味した。ついに1911年10月に辛亥革命が起こり、また、翌年共和政体が樹立された。

「西洋の衝撃」への対応として、「西洋に学ぶ」という使命感をもつ革命派が、欧米革命のような暴力革命を起こさなければならないことを明確に認識したことも含めて、中国政治制度改革のための「覚悟」及びこの「覚悟」を実現するための方法論を考察することが、清末中国における「西洋に学ぶ」思潮の典型であったと言っても過言ではない。

この時期において知識人革命派の中の一人であった蔡元培は、上述したように高揚した革命風潮の中で、1902年から上海で革命運動に参加した。彼は教育を重視し、革命人材を育成することを理念に持つ革命的な教育団体である中国教育会の会長、愛国女学校及び愛国学社総理などの職を歴任し、革命運動に即応する新しい人材の養成に尽力した。ここで、注意す

べき点は、蔡元培とほかの革命家の異なった点は、革命人材の育成することによって革命運動に身を投じたことである。新しい人材の養成は蔡元培にとって、終生の目標であり、生涯に亘って実践したことであった。このような極めて明確且つ終始一貫した人生指標は近代中国において大きな意味を持っている。清王朝廷の高官を辞して、翰林から新しい人材の養成に身を投じという重大な転換を行ったのは、彼がこの時点において一生における重大な思想と行動を得たからであると思う。

民族的な危機感と強め、上海で反清革命運動に参加した蔡元培は、国を「救亡」するために、ドイツに四年間に留学した。ここで、彼は西洋伝来の進化論や政治社会思想を学ぶと共に、哲学思想などの西洋文化を習得した。また、西洋の政治制度及び文化・教育・科学全ての領域を考察し、研究した。このことによって、蔡元培は、同時代のほかの思想家よりも思想文化を改造し建設することの重要性に着目していた。これらは、後日彼の果たした役割の中で発揮されている。科挙の試験に合格し、若くして翰林院庶吉士・編修の地位を与えられた蔡元培の伝統思想との葛藤は熾烈であったことであろう。民族の危機という時代意識を強烈に持っていた彼が伝統的な道を棄て、西洋に学び、反清革命運動に参加し、時代の潮流に合わせるよう努力したことは注目に値する。当時の大多数の知識人は、伝統文化から脱却することができなかった。例えば、戊戌政変によって、変法が失敗した後、梁啓超とその恩師である康有為が相違した考え方をもちようになったことがあげられる。梁啓超は「進化論」、「国家観」及び「民権論」をとなえると同時に「民権革命」論と「開明専制」論を提唱したが、康有為は「保皇」論に相変わらず固執していた。康有為が維新変法で提示した論理的根拠は、『孔子改制考』及び『新学偽経考』に示された政治論と思惟方法であった。つまり、孔子の思想を借りて、変法を主張し、「西洋に学ぶ」ことを強調したのである。また、20世紀初期の革命運動に積極的に参加した急進的な革命家であり、「先哲の精神」であった章炳麟すらもが、中華民国臨時政府成立直前に孫文と対立し、後に隠居して「静かな生活を送る」学者としての余生を送ったのであった。このことは、当時の大多数の知識人が、伝統文化から脱却することができず、彼らにとって伝統思想との葛藤が最も深刻な知的かつ実践的問題の一つであったことを物語る。

1911年10月に武昌蜂起が発生した際、ドイツに滞在中であった蔡元培は現地で留学生を動員し、国内の革命運動に声援を送った。その後、留学生生活を急遽中断し、上海に戻り、新政権誕生の準備作業を行った。

翌年の1月1日中華民国臨時政府が樹立された。蔡元培はこの新政権において教育総長（大臣）を務めた。中華民国における初代教育最高指導者の職に就任して、蔡元培は中国教育近代化を第一の目標と定めた。長年に亘って存続してきた中国の封建教育制度や、方針などを廃止し、反封建的なブルジョア教育思想、政策及び制度を樹立した。この新しい教育制度及び思想は、中国の封建主義に反対する先鋒の役割を果たした。さらに、四年後全国に広がることになる、旧文化に反対し、新文化の創造と国民精神の改造などを提唱する新文化運動に直接的影響を与えた。

ただ、数千年に亘って、中国に支配した封建思想や、人々の心に深く浸透している影響を消し去ることは決して容易なことではない。また、旧制度は打破されたが、その制度を支えた封建勢力を徹底的に消滅させることも簡単ではなかった。新しく誕生したブルジョア民主共和体制をとった中華民国臨時政府は成立後間もなく北洋軍閥の代表者であった袁世凱によって篡権され、封建勢力に逆もどりした。この深刻な局面に直面して、蔡元培は袁の独裁支配に強い不満の意を表わす一方で、教育と政治は無関係であるという「教育独立論」を主張したのであった。即ち、政治と教育、政治と学術を分離させるべきであると強調したのである。しかし、袁世凱が封建勢力の代表者である限り、これらの民主的な主張に耳を傾けることはなかった。これによって蔡元培は教育総長を辞任し、再び欧州に留学して学究生活に入った。四年後の1916年12月彼は当時の教育総長の要請を受けて帰国し、北京大学学長に就任した。北京大学の前身は、戊戌変法時期に作られた京師大学堂であり、民国以後北京大学と改名されて中国最高の官学となっていた。しかし、当時は北洋軍閥の支配の下で、学風は極めて腐朽し、学術研究の空気は欠乏し、封建思想が氾濫していた。1917年からの十年間、蔡元培は北京大学学長として旧勢力から様々な圧力にさらされながらもそれらの障害を排除し、あらゆる困難にも克服し、北京大学の大胆、且つ全面的な改革と整頓を行った。このような努力の結果、北京大学は五四運動の発生地及び中心地として世界にその名をとどろかせた。これは、「蔡元培の植えつけた新精神の種がいかにかに中国の学生間に滲透し、発芽し、実った」(8)の結果であったのである。改革に成功した北京大学の経験は北京大学に止まらず、全国の思想文化界にも波及した。北京大学のこの経験が封建主義の残滓に反対し、国民思想を解放し、新文化を創造し、新思想を普及させることなどに大きく貢献したといっても言い過ぎではない。

こうした民国時期の各種政治勢力の相互関係から中国の近現代史を考察してみると、蔡元

培の非政治主義大学的自治原則は、かえって重要な政治的作用を起こした(9)という説にもうなずける。

上述したように近代中国社会における厳しい民族危機が蔡元培の近代化思想形成の最大且つ客観的な原因であった。彼は、「救亡図存」という目的のために封建旧制度を打破し、教育文化の側面から社会改革を実現し、中華を振興し、「民主と科学」という思想解放運動を推進した。更に資本主義の近代化を全面的に展開するためには中華传统文化の束縛から脱却し、西洋文化を「兼容并包」の精神をもって探求し、学ぶことは必要であると認識した上で、積極的に取り込むことをめざした。即ち、「西洋の衝撃」を受けて激動する時代背景と新思想の追求は蔡元培の近代的思想を形成の要因であった。つまり「時事造英雄」ということである。

中華民国初代教育総長(文部大臣)と北京大学学長及び中国科学研究の最高機関としての中央研究院院長を務めた蔡元培は、清朝、袁世凱、北洋軍閥支配、国民党統治時代を生き、また、戊戌変法、辛亥革命、五四運動等激動する政治危機の時代を過ごした。こうした彼の経歴の中に、近代中国社会の変動の様相の連続性を認めることができる。一方、民国時期における国民国家を建設しようという目標の萌芽とその発展途上に示されたさまざまな曲折や艱難に歴史の不連続性を見ることもできる。思想上の変動は近代中国の変動の原点である。従って、蔡元培教育思想と近代中国における影響を辿ることで、激動の中国の思想文化発展とその変動の歴史構造を解明することができると思う。

第二章 蔡元培教育思想とその歴史及び現実的意義

前章で触れた「兼容并包」精神と態度は、蔡元培の一生を貫いた性格的精神的な最大の特徴であることは長年に渡って学界の定説となっている。

蔡元培とその教育思想の歴史的意義に関して、日本における中国近現代史研究の重鎮として知られている竹内好は、1951年の2月に発表した「五・四運動と蔡元培」という一文の中で次のように述べた。「蔡元培の名は、日本ではあまり知られていない。しかし、中国の近代史上においては、とくに精神史の面においては、かれは第一に数えられるべき人物である。中華民国の学制と、今日の中国の教育精神とは、ほとんどかれ一人の手に成ったといってもいい。かれは学者としても一家をなしており、政治家としても、同盟会以来の古い革命党員であり国民党の長老格であった。もし今日まで生きていれば、当然、中華人民共和国の中央政

府の副主席に選ばれるべき人物である。かれが働いたのはもっぱら教育界においてであった。」また、「かれは前清の進士（最高の学位で同時に資格）であり、栄達を保証された身分であったにもかかわらず、若いときに仕官を捨てて教育界に身を投じた。教育こそ中国を救う道であると考え、人材の養成につとめた。そして終生その方針を変えなかった。かれは教育行政家であるよりも、真の教育者であり、全人格をもって中国に新しい精神を打ち樹てようとしたのである。魯迅は深くその薫陶を受けている。」さらに、竹内好は、「思想家としての蔡元培は、儒教的な人格主義をドイツ流の観念論的理想主義に融合させたところに特色がある。かれは中国におけるドイツ学の先達の一人である。ただ、ドイツ流の絶対主義は継いでいないで、これをフランス思想で中和させている。大陸哲学を教養の根幹としている点が、イギリス経験論から影響された多くの思想家たち、とくに孫文とは、きわ立った対照を示す。熱烈な、むしろ戦闘的な自由主義者であり、かつ人道主義であった。」(10)と続けている。この見解は、蔡元培思想の精神的特徴とその源泉を剔出したものである。

アヘン戦争以後、中国思想文化界において、「器物の覚悟」から「制度の覚悟」に至るまで進んだ認識と運動が現れたことは前章で既に論及した。しかし、ここで指摘すべきは、中華を復興の視点から「精神の覚悟」も必要であるという主張が中華民国が成立した直後の動向であったことである。中国国民の精神及び倫理道德の覚悟がより重要であることを痛感していた蔡元培がこの難問題に全力を挙げたことは竹内好が分析した通りである。

蔡元培は、中国を改造するための根本的な作業は国民性の改造と直接関わっている教育の改革および新教育の普及であると認識した。日清戦争の敗北と戊戌変法の夭折によって、彼は中華文化を反省した上、中華を振興するためには、進んだ外国文化を吸収し、中国に導入しなければならないという結論に達した。明治維新後、日本は、鎖国政策から脱却し、それまで崇拜してきた中国文化から離脱して西欧文明に接近し、所謂「脱亜入欧」を目指し、各領域において大きな改革事業を行いながら、西洋文明を導入して、特色ある文化を作り出したことは周知の通りである。

激動する中国社会の潮流下において、蔡元培は、近代国家及び文明国を建設しようという理念から出発して、西洋文明、先進文化、思想、制度を中国社会へ導入する必要性を認識した。更には、伝統文化の精髓を維持、保護すると同時に有用な外来の文化、思想を吸収し、これらを融合させことによって社会の変革が実現すると認識したのである。日清戦争直後、中国の失敗の原因を分析した上で、国家の危機を救うためには人材の育成にとくに留意しな

ければならないと認識した蔡元培が愛国学社の学生に説いたのは、国家を挽救するためには国際関係を理解し、外国語を学び、外国書を読み、演説の訓練をし、それによって民衆を自覚めさせるということであった。「現在中国は各国に虐げられ、この状態に至っている。『敵を知り己れを知れば百戦危うからず』、我々は自分の弱点を知り、また国際情勢を理解しなければならない。」「中国国民は極度の苦痛を受けており、また苦痛の原因を知らない。立ち上がって団結し、自分達で苦痛を取り除くことができないのが中国根本的弱点なのである。君達は将来卒業してから民衆を呼び醒まし、彼らの知識を広げなければならない。」(11) という人材論を彼は20世紀初期に強調したのである。また、この思想の形成に当たって重要なポイントとなったのは戊戌変法が失敗ことによって改良主義の破産が宣告されたことである。蔡元培は康有為、梁啓超の変法運動が失敗した理由を、「革新的人材の養成を先にせずして少数のもので政権をとり、頑固な旧勢力を排斥しようとしたため、一面的に情勢をみざるを得なかった」(12)と理解していた。蔡元培は、政治改革のためになによりも人材育成が必要であり、教育が人材育成の根本過程であるということを明確に認識していた。また、蔡元培は近代国家構築の目標をめぐって、一貫して国家近代化のための人材の養成に心血を傾けていたが、それは知識の育成のみならず、近代新思想の啓蒙をも重視するものであった。

20世紀初期、蔡元培が近代国家観に基づいて、「教育を名目として秘かに革命を鼓吹する」(13)のために、友人と一緒に1902年上海に創立した革命団体中国教育会は、「理想的国民を生み出し、それによって理想的国家を作り出そうと切実に思う」、「我々は共和制下の国民を作り出したいと思い、そのためには共和制に基づいた教育が必要となる」(14)、また、「中国の男女を教育することによって、その知識を開発し、その国家観念を増進し、もって国権の基礎を回復する」(15)という目的を持っていた。この目的は中国ブルジョア民主革命に呼応するものであった。ここで、次の二点を指摘することができる。(1) 中国教育会には、蔡元培の共和的近代中国の建設、また、それに適応すべき共和的教育の理想が示されている。(2) 蔡元培は、日中両国の国体と国情の差異、さらにはそこから生まれる国家理念の相違を理解しており、その理解の上に立って理想的共和国を造ろうとした。彼のこの先見的認識と実践は、1905年から1907年にかけて行われた革命派と改良派の間の論戦において、その妥当性を証明した。

さらに、蔡元培は、「革命精神は、男女を問わず、皆提唱すべきである。而も教育は根本である」(16)、「完全人格を造成することで、国家は富強となり、衰亡しない」(17)「我が国は

科学知識は遅れているが、国人の知識が遅れている訳ではない。中国を振興したいのであれば科学化に尽力することを主張するしかない。それ故、人材に期待している。これが目下の急務である。空談の旧習を改変し、実際の探求することに、国家の前途を望むことができる」(18)と主張した。さらには、教育者に対し「時勢を順応し、共和国民の健全な人材を養成すべき」であることを望んでいた蔡元培は、新しい時代の教育理念及び方針を作り出す一方で、新教育制度を徹底的に実施しようという主張を全社会に呼びかけたのである。

蔡元培の中国近代化に向けた思想のなかで、教育改革及び教育の近代化は重要な内容である。中華民国初期において発表された「教育方針に対する意見」は、中国教育史の中で画期的意義と積極的作用を果たしたものとして高く評価されている。ここで指摘をおきたいのは、彼が導入した教育制度が明治日本の教育制度を参考したことを否認できないということである。蔡元培は、このことについて次のように分析している。「現在に至るまで、我々の教育規定は日本にならうことが多い。これは我々がなござりにしていたからではない。我々は日本の学制がもともと欧州各国に倣ったのを知っている。ただ、欧州各国の学制も歴史上少しづつ形成されたもので、画一的に整っているわけではなく、また、西洋人の特別な慣習も含んでいるのである。日本は明治維新の時に西洋各国の制度を取り入れ、これを折衷したが、その経験に倣うことが中国に適しているのである」(19)。このように、蔡元培が外国の経験を重視し、中国に適しにものを積極的に吸収しようとしたことが証明できる。

1912年の中華民国の誕生は中国歴史上に重要な転換期といえと同時に教育史においても同様に画期的時代の幕開けであったといえる。教育総長であった蔡元培は、中国に継続した従来の教育制度の特質は「君を忠することは共和政体に合わず、また、孔子を尊ぶことは信教自由と相違す」(20)として批判し、それと同時に「軍国民教育」(軍事・体育)、実利主義教育(智育)、公民道徳教育(徳育)、世界観教育及び美学など五項目の新教育方針と目標即ち、「五育」方針を発表した。旧体制と異なったこうした教育方針は蔡元培教育思想の中核をなす。彼は、上記の「五育」を有機的に結合して、中国近代化のための新しい人材を育成する意味を示したのである。彼は、この教育思想に対し、次のように論じた。軍国民教育と実利主義教育は「強兵富国の主義」であり(21)、公民道徳教育は「自由、平等、博愛という精神」を体現し(22)、世界観教育は「即ち哲学の課程であり、周秦諸子と印度哲学及び欧州哲学を以て二千年来の孔学を黙守する旧習を打破する」(23)と。さらには美学の作用は「美感は普遍性であり、人間の偏見を破ることができ、美感は超越性であり、生死

利害の顧慮を破ることができ、教育において特に重視すべき」(24)であると彼は考えた。蔡元培はさらにこの「五育」は各自の異なる教育作用を持有しているが、一つ一つが相互関係にあり、しかも統一している整体でもあるので、一つも欠かすことはできないと主張した。これは次のような彼の言説からもうかがうことできる。「五育は、皆今日教育において偏廢することはできない」(25)「軍国主義、実利主義及び徳育主義この三者は政治の教育に属している。……世界観、美育主義二者は、政治を超える教育である。」(26)ここで指摘すべきは、このような哲学を深く内包している新教育思想は、中国伝統文化の内容を含み、その影響をうけている一方で、西洋の哲学と教育思想の痕跡も見えることである。これは、蔡元培が中国伝統文化に深く根ざしていることを反映しているが、西洋文化にも精通していることをあらわしている。また、ここには蔡元培の新しい教育理念が現れているのみならず、その機能はすでに社会の実践から証明されたのである。この「五育」を併挙した教育制度は教育領域だけではなく、思想及び文化領域までも、衝撃的な意義を発揮した。即ち、長期に亘る封建主義の束縛を打破し、人々の思想と個性の解放及び社会の改良を促進することに直接的な意義をもたらした。また、近代国家が求める人材をどのように育成すべきかについて明らかにしている。

即ち、これが、蔡元培が教育を改革するに当たって、総合的な指導思想であり、近代中国教育体制を建設するための重要な理論基礎でもあった。帝政は既に崩れ、共和政体も既に立ったが、これからの使命は国家建設であり、近代化の目標を実現であった。このような重大な任務を負っているのは教育であり、近代化国家が求める「健全な人材」であることを蔡元培は、明確に認識しているのである。

「尊孔読経」に反対することは、蔡元培教育思想の重要な内容であり、「五育」併挙の教育方針の反映である。民主共和の政体は樹立されたが、当時中国社会では、封建思想の影響がまだ残っているのが実態であった。袁世凱称帝後、「尊孔読経」が復活され、また、一部の人は孔教を国教に定めることを提唱した。たとえば、戊戌変法の指導者であり、保皇派のひとりでもある康有為はその「孔教会序」で、「共和以来、礼樂共に廢し、典章皆替り、道と法も残らずなどということ、これ皆教育指導者が孔子の祀典を廢止したからである、……数千年文明の中華は、無教の国になり、極めて悲哀なることである(27)と新教育を批判した。ここで非難された「教育指導者」は蔡元培であり、また、批判の対象は蔡元培の教育に対する改革及び尊孔読経の廢止したことである。ただ、蔡元培はこの逆境を前にしても後退しな

かった。彼は、経科教育は学生が世界観を形成するためには障害となることを強調し、保守勢力に反発した。彼は「私は従来董仲舒の百家を廃し、孔氏のみ尊することは反対している。清代教育宗旨の中に『尊孔』という内容は民国初年教育部が教育方針を公表する時、既に時代と合わないと言明した。」(28) また、「私は小学生が経を読むことは有害であり、中学生が経を一冊全部読むことも有害であると考える」(29) ことを表明する一方で、「科学的方法で、国粹の真相を解明しよう」(30) と強調した。さらには、彼は学術の発展と繁栄の目的のために、「伝統文化を整理して、それを新時代において有用なものにする」(31) 即ち、孔子の思想及び学説の研究と後の「尊孔」の立場とを区別すべきであると強調した。即ち、蔡元培は、孔子の思想・学説は学派として、学術研究を進めるべきであり、盲目的に「尊孔」すべきではないと主張していたのである。彼は、小学生の「読経」を反対すると同時に、「大学国文系の学生に『詩経』を講義し、歴史系の学生に『書経』と『春秋』を講義し、哲学系の学生に『論語』、『孟子』、『易伝』と『礼記』などを講義することには賛成できる。また、中学生に何篇かの伝統的文章を選んで、古文読本に入れることも賛成できる」(32) という見解を示した。このように、蔡元培は孔子の学説を含め中国伝統の儒家典籍を中国思想文化の遺産として、一定の思考力及び鑑別能力を持っている青年学生に学習・理解させるように主張した。ここには彼が伝統文化を全面的に否定する一派、即ち、中国の伝統文化を全面に廃棄する立場をとるのではなく、また新文化運動時期の急進的な「反孔派」でもない、ただ科学的な立場と方法で研究すべきであるという一貫した観点を持っていたことが伺える。

民国初期は、「百廢待興」、即ち、従来の政策、方針などを破って、新しい道を確立するという時期であった。近代新教育思想及び方針を実施するために、蔡元培は清末の各種封建主義的な教育法規と制度を廃止した上で、近代進歩主義的な意義を持つ新教育法令と学校規則を制定した。教育総長の任期内に、蔡元培は「普通教育暫定法」、「普通教育暫定課程標準」、「民国教育部官職令」など一連の教育法令と法規を公布し、教育を革新し、近代教育の確立するための多くの意見と主張を発表した。これらの新しい教育法令と論述は、新型の教育思想を更に具体的なものにした。前述したように経科教育を廃止したほか、学制を改革し、教材を改編し、普通教育を促進すると同時に、実業と軍事体育教育を重視し、社会教育の発展を提唱するなど中国教育における四つの難題を解決したのであった。このような教育改革により、「清末新政」より一層教育近代化が進んだともいえる。近代中国の教育近代化を目指した蔡元培は、次のような教育論理を持っていた。即ち、教育というのは、「教」と「育」の両方

から成り立つであるが、「教」という重大な責任を持つ教員の素質を重視するだけではなく、教育を受ける学生の「育」も重視しなければならない。それ故、学生に教育と訓練を与えた上で、智力を開発し、世界観を形成させ、個性を養成し、生活の能力を高め、更に世界に対するものの考え方や問題に対し、自主的に解決する能力を育成・向上させるという目標を設定した。さらには当時の中国教育水準の低さから速やかに脱却するために教育を普及させ、社会改良のための人材を育成し、その上で民主と科学を確立することが目下の要務であると認識したのであった。これは、上述したような民国初期の中国思想界における「尊孔」をめぐる激烈な論争が行われるという風潮の中で、蔡元培の教育改革が艱難な道を歩んでいたことを物語る。

全民族の教育水準と文化素質の最大限の向上を求める蔡元培は、民国が建てられた際に、「中華民国成立後の第一回中央教育会議」を主催した。彼は「中国の政体は既に更新され、社会も一般的な思想も改革された。今回の教育会議は即ち、全国教育改革の起点であり」、「本会議が既に決議した案は、将来にも必ず影響する」(33)と指摘した。さらに、新旧教育の根本的な違いは、「学生の主動性を發揮させるか否か」(34)であり、また、旧教育の弊害は「教育を受ける学生に皆従属心と保守的傾向を持たせるゆえに政府の支配を受けやすい」ことであるとした。また、彼は西洋の教育を考察した後、中国における旧教育の目標は「仕官の人材を養成することであり」、教育方法は「瓶に水を注ぐように、満瓶であれば終了する」のである(35)と考えていた。しかし、新教育はこのような学生の個性及び思想を封じ込める方法であってはならなかった。学生の独立して思考する能力を高め、学生の個性を發揮を重視すべきであるという基本的立場から、彼は教育の精神は「完全な人格を養成」(36)することであると強調した。近代中国の先進的な知識人の、封建主義的旧教育を打破しようとする強烈な意志と願望が、こうした主張に表われていると言わせざるを得ない。

更に、蔡元培の教育思想の中で美育思想は極めて重要な内容を占めている。かれは、ドイツのライプチヒ大学に留学した際、「後世の哲学者にも反対のない」(37)カントの哲学美学思想の影響を強く受け、美学の学習と研究を十分に重視した。彼は「修身は徳育であり、而も、美育及び世界観を参す」(38)と述べたが、ここで言う美育について、「わが国では今まで、美学は建設してないし、教育者も美学を普及する計画をまだつていなかった」(39)と述べた。さらに、「美育という言葉は、民国元年私が独語のÄsthetische Erziehung から訳したのであって、今までなかった言葉である」(40)と語った。現代中国における、著名な教育者の

一人であり、清末に日本に留学した陳望道が指摘したように、「中国における美学の歴史は、実際は蔡元培先生の提唱からはじまり」、中国の「美育は蔡元培先生の主唱」であったのである。(41) 国民の情操を向上させるために、美育は重要な教育であると認識していた蔡元培は、「プラトンが美学主義を提出してから、大勢の教育者は皆美術は社会改造の工具であることを認め」(42) たと指摘した。それと同時に「美育者は、教育の中に美学の理論を応用し、これを以て感情の陶冶を目的とするのである」(43) ことを強調する一方で、「美育を以て宗教に代える」という役割をも主張した。美育と社会改良をつなげることは、近代中国において重要な意味を持っている。

ここで注意しなければならない点は、女子教育の問題である。「男尊女卑」の封建社会では、「女子が才能が無いのは徳である」という信条が存続していた。こうした背景の中で、「綱常」礼教の圧迫を受けていた女子は教育を受けるのとは無縁であった。蔡元培は清末から男女平等を提唱し、女子学校を開設し、女子は教育の権利を持つことを主張した。更に「革命精神は、男女を問わず、皆提唱すべきである。その上での教育は根本的なものである」(44)、「完全な人格は、男女同様」(45) であり、「男女は皆教育を受けすべきである」(46) という男女平等論を強調した。これと平行する様に彼は男女共学制度を作り出した。ここに数千年来の伝統に終止符が打たれたことは近代中国における女性解放運動の出発点でもあった。

蔡元培教育思想は、北京大学長時代にさらに展開されたのである。蔡元培の大学教育思想及び北京大学における建設的な役割は前章の中に竹内好の言葉を借りて簡単に触れたが、ここで改めて簡潔に述べる必要があると思う。

北洋官僚政府の管轄の下、学風も腐敗していた北京大学の学長を命じられた蔡元培は、1917年1月4日上海から北京に赴任した。1919年世界を驚かせた五四運動発生した二年半前のことである。蔡元培は大学教育は、「私の観察によると、一地方に大学が設けない、また高等学術の研究及び教育事業の遂行がなされなければ、教育発展の希望を実現することは永遠にできない」(47) というほどの重要性を持つと一貫して認識していた。従って、北京大学の改革とは、まず観念の改革からはじまると意識した蔡元培は、学長に就任した際、大学運営の理念は「兼容并包、思想自由」(48) であると示した。その上で、開学式の演説の中で「大学とは、高深学問を研究する場であり」(49)、「大学は学問研究の機関であって、資格養成所ではなく、知識の販売所でもない」(50)、「科学の研究は、本学の主旨である」(51) という名言を残した。当時の北京大学の状況に関しては、蔡元培は次のように総括した「学生は学問

に対して興味がない。年限満了後、一枚の卒業証書を得ることしか考えていない、……趣味のない授業では、学生は寝たり、無関係の本読んでいだりする。放課後、プリントを持ち帰り、本棚に置いてそのままだ。学期、学年或いは卒業試験の時、真面目な教員の場合は、学生は徹夜で復習するが、試験終了後、これらの書籍や資料など永遠に読むことはない。……学生の目標は、卒業だけでなく、卒業後の進路にある。……厳しい教員は、学生は余り歓迎しない。」(51) このような学風を改えるために「私は、就任の初講演で、学生に『大学の学生は、学術研究することが天職であり』、大学は『昇官発財』のための階段ではないと言った」(52) ことを強調すると同時に、「宗旨を確定すること、徳行を育成すること及び師友を敬愛すること」の三項目の要求を学生に提出していた。

このような理念を持って北京大学の改革に着手した蔡元培は、学生が学問研究を愛好するように育成することから教師陣の整頓まで、改革を着実に進めていた。彼は、教師を採用する際、「兼容并包」の原則に則り、学問と新思想を持つ学者を中心に採用する一方で、保守的思想を持つ学者も任用した。教師の任用条件は、教育に熱心な学者であることであつた。「人材は極めて得難い。若し『求全責備』でなれば、学校の成立は困難である」(53) ため、思想の自由と兼容并包主義に反しない限り、教員の政治的観点や、所属党派や、年齢、学歴、資格、さらに個人の立場から学外活動に参加するなどを一切問わなかつた。「学外での言論と行動は自由であり、本学は干渉すべきではない。責任も問わない」(54) という方針であつたのである。

こうした「世界の通例に倣い、思想自由の原則に従い、兼容并包主義を取る」(55) 教員任用原則は、「積学而熱心な教員を聘請」し、「学風を整頓」(56) するためのものであつた。

蔡元培は、「積学で熱心な教員を広く任用し、真剣に教育し、学生の学問研究の趣味を向上」(57) することを目標としていたと同時に、学生の高尚な情操を育成するために課外活動を重視した。彼の支持によって、体育会、音楽会、書道研究会、社会主義研究会、マルクス主義研究会など様々な学生組織が誕生し、学生に「正当の娯楽を供す」(58) ことができた。また、平民学校と平民講演団及び『新青年』、『毎週評論』など、「学生の自発の精神を發揚、社会に奉仕する能力を養成すること」を「最重要な事項」とする学生社团や新聞雑誌がキャンパスに相次いで現れ、学生の課外活動を充実させたのである。これらの一連の改革措置によって、北京大学の腐朽した学風は激変し、学術研究の空気が充満し、新旧思想をめぐる論争の結果、民主と科学の旗は北京大学に高く揚がり、新しい思想は広がった。面目を一新した北京大学は、近代中国において新文化運動の中心地及び五四運動の発祥地となり、今なお

も中国近代思想史の発展過程の中心地であることはいうまでもない。

清末民国初期の激動する時代背景の中で腐朽した社会の改良、封建的な教育の改革、新時代の人材を育成及び教育近代化の実現などが急務であると痛感していた蔡元培は、終生時代の潮流に合わせ、進歩を追求し、民主と科学を提唱することによって、教育に尽力した。また、学術の発展と繁栄を促進するための思想の自由及び「兼容并包」の大学教育思想は、近代中国において、思想文化界のみならず、政治領域にも影響を及ぼした。

ここに言及すべきは、明治日本と清朝中国の有識者が同様に民智の開発を提唱していたことである。特に日本の明治期において、「文化の普及」と「民智の啓発」を主張した森有礼、木戸孝允など啓蒙思想家は、民衆の文明レベルと国家の命運とは直接に関わっていると認識し、明治政権確立後の十年間、農村に至るまで広範囲にわたって国家の独立自尊のため文明開化の啓蒙教育を全国に展開し、更に近代化を促進した。

一方、清末中国では、「新政」潮流の中で、鄭観応、嚴復、何啓、胡礼垣、梁啓超などの先駆知識人も教育普及及び人材培養すべきであると宣伝したが、蔡元培のように近代教育制度を建設し、国民素質の向上、教育近代化の実現を求め、さらに近代中国の文化・科学及び政治領域まで影響を与えた者は皆無であった。前述した竹内好が指摘したように「今日の中国の教育精神とは、ほとんどかれ一人の手に成ったとってもいい」(59)である。

こうした一貫した蔡元培の中西教育融合思想及び行動の形成要因について、後世の研究者が「固有文化の遺産を受容する一方、19世紀の民主主義と自由主義新思想も吸収し」(60) また「中国固有文化の精髓を凝集させ、西洋文化の優美を採択し」た(61)との評価を与えたことは、的を射たものである。

今日中国の社会改革の流れの中で、国民が民族の自我更新することが重要であることは蔡元培の時代とは同様であることを現在改めて認識されている。教育そのものの規律と根本的な任務、即ち「完全人格」(62)を養成することの意義は益々重視されている。この意味では、蔡元培教育思想の現実的意義はその歴史的な意義を越えたのである。現在の経済の高度成長につれて、益々深刻になっている功利主義的傾向を克服ために、「完全人格を養成」(63)することは、緊急の社会的課題となっている。蔡元培の「健全な人格を養成」という理想は、今日実現しなければならないのである、また、この問題と密接にかかわっている「民主と科学」という目標を遂行する時必要となる「兼容并包」原則も現在の中国において不可欠な精神であると思う。

結論

近代中国における「救亡図存」運動の流れの中で、蔡元培が提出した教育救国と教育興国思想は、時代が要求したものであった。蔡元培は「我々が、切実に教育を着手すれば、我が国の危機は解決することをできる」(64) また「社会の改良は、まず教育であり」(65)、「教育は国家の根本的な命脈である」(66)と語っている。教育の役割をこのような明確に認識し、また、終生にわたって近代国家に必要な人材の育成に全力上げた蔡元培とその思想の意義は、近代中国発展史上、前人未踏の働きを果たしたのである。

蔡元培教育思想の意義は、中国近代教育制度の創立、国民知識の啓蒙、「無数の革命青年の育成」、画期的な五四新文化運動の提唱、民衆思想の解放などに止まらない。今日でも、中国において、教育は立国の根本であり、「育人」は、興邦の良策であること、また物質文明を重視すると同時に精神文明、国民素質を向上するなどの信念が明示されている。また、中国の近代化のために、「民主と科学」の精神及び「兼容并包」の原則は、依然として必要とされている。こうした意味で、蔡元培の教育思想研究はなお不可欠である一方、蔡元培の教育思想の意義を今日の中国においても再確認することが必要である。

注：

- (1) 李鴻章「籌議海防折」『李文忠公全書』「奏稿」、『台湾文献叢刊』第131種第24巻、24頁。
- (2) 陳独秀「吾人最後之覚悟」『陳独秀著作選』（上海人民出版社、1984年）第1巻、175頁。
- (3) 康有為「上清帝第四書」『康有為政論集』（中華書局、1981年）114頁。
- (4) 『中国近代史資料叢刊・戊戌変法Ⅲ』（神州国光社、1953年）3頁。
- (5) 康有為『日本変政考』序文、（故宫博物院藏本）
- (6) 梁啓超「戊戌政変記」『飲冰室合集・專集』（上海・中華書局）第1冊、113頁。
- (7) 羅家倫『逝者如斯集』（台北伝記文学出版社、1967年）80頁。
- (8) 竹内好「五・四運動と蔡元培」『日本と中国のあいだ』（文藝春秋社、1973年）33頁。
- (9) 山田辰雄「五・四運動研究史シンポジウム報告」『五・四運動研究史シンポジウム記録』（中央大学人文科学研究所、1988年）42頁。
- (10) (59) 竹内好「五・四運動と蔡元培」前掲『日本と中国のあいだ』32頁。
- (11) 黄炎培『八十年来』（文史資料出版社、1982年）33頁。

- (12) 「蔡元培口述伝略」蔡建国（編）『蔡元培先生紀念集』（中華書局、1984年）251頁。
- (13) 蔣維喬「中国教育会之回憶」前掲『蔡元培先生紀念集』28頁。
- (14) 「愛国学社之建設」『選報』第35期、教育言六、22頁。
- (15) 「中国教育会章程」前掲『選報』第21期。
- (16) (17) 蔡元培「在愛国女学校之演説」『蔡元培全集』（中華書局、1984年）第3卷、7、8頁。
- (18) 蔡元培「科学界の偉人・序」前掲『蔡元培全集』第7卷、78頁。
- (19) 蔡元培「全国臨時教育会議閉会詞」前掲『蔡元培全集』第2卷、264頁。
- (20) 蔡元培「对于新教育之意見」前掲『蔡元培全集』第2卷、136頁。
- (21) (22) 蔡元培「对于新教育之意見」前掲『蔡元培全集』第2卷、131頁。
- (23) (24) 蔡元培「我在教育界の経験」前掲『蔡元培先生紀念集』244頁。
- (25) (26) 蔡元培「对于新教育之意見」前掲『蔡元培全集』第2卷、134-135頁。
- (27) 康有為「孔教会序二」前掲『康有為政論集』737～738頁。
- (28) 蔡元培「我在北京大学の経歴」前掲『蔡元培先生紀念集』235頁。
- (29) (32) 蔡元培「關於読経問題」前掲『蔡元培全集』第6卷、527、526頁。
- (30) 蔡元培「北京大学月刊發刊詞」前掲『蔡元培全集』第3卷、210頁。
- (31) 蔡建国『蔡元培与近代中国』（上海社会科学院出版社、1997年）152頁参照。
- (33) 蔡元培「全国臨時教育会議開会詞」前掲『蔡元培全集』第2卷、262頁。
- (34) (35) 蔡元培「普通教育和職業教育」前掲『蔡元培全集』第3卷、477、475頁。
- (36) (45) (62) (63) 蔡元培「在愛国女学校之演説」前掲『蔡元培全集』第3卷、8頁。
- (37) (38) 蔡元培「对于教育方針之意見」前掲『蔡元培全集』第2卷、134、135頁。
- (39) 蔡元培「美学的進化」前掲『蔡元培全集』第4卷、20頁と同氏「二十五年来中国之美育」前掲『蔡元培全集』第6卷、54頁参照。
- (40) 蔡元培「二十五年来中国之美育」前掲『蔡元培全集』第6卷、54頁。
- (41) 陳望道「美学綱要」『陳望道文集』（上海人民出版社、1979年）第1卷、455頁。
- (42) 蔡元培「美学的起原」前掲『蔡元培全集』第3卷、424頁。
- (43) 蔡元培「美育」前掲『蔡元培全集』第5卷、508頁。
- (44) 蔡元培「在愛国女学校之演説」前掲『蔡元培全集』第3卷、7頁。
- (46) 蔡元培「对于師範生の希望」前掲『蔡元培全集』第4卷、34頁。
- (47) 蔡元培「湖南自修大学紹介与説明」前掲『蔡元培全集』第4卷、245頁。

- (48) (53) (54) (55) 蔡元培「致『公言報』函并答林琴南函」前揭『蔡元培全集』第3卷、271頁。
- (49) 蔡元培「就任北京大學校長之演說」前揭『蔡元培全集』第3卷、5頁。
- (50) 蔡元培「北大一九一八年開學式演說詞」前揭『蔡元培全集』第3卷、191頁。
- (51) (52) 蔡元培「我在北京大學的經歷」前揭『蔡元培先生紀念集』232、233頁。
- (56) 蔡元培「復吳敬恒函」前揭『蔡元培全集』第3卷、11頁。
- (57) (58) 蔡元培「自寫年譜」前揭『蔡元培全集』第7卷、319頁。
- (60) 胡愈之「我所見的蔡元培先生」前揭『蔡元培先生紀念集』102頁。
- (61) 羅家倫「偉大與崇高」前揭『蔡元培先生紀念集』83頁。
- (64) 蔡元培「致汪兆銘函」前揭『蔡元培全集』第3卷、26頁。
- (65) 蔡元培「留法儉學會緣起及會約」前揭『蔡元培全集』第3卷、36頁。
- (66) 蔡元培「北京國立八校校長呈教育部總長文」前揭『蔡元培全集』第4卷、162頁。